
IS 新しい人生

zero

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 新しい人生

【Nコード】

N2861Z

【作者名】

zero

【あらすじ】

神様のミスで死んでしまった青年がチートなISと不思議な力を持ってISの世界に転生するおはなしです。キャラ崩壊とかしていきますのでそこらへんのところはよろしくお願いします。

プロローグ（前書き）

ありがとうございます。どうかよろしくお願いします。

プロローグ

「あれここはどこだ？」

真っ白な空間に俺はいた

【やあ、目覚めたかい？ここは神界と呼ばれるところじゃよ】

突然目の前に白いローブをきた老人が現れた

神界なにいつているんだこいつは？頭がいかれているのか？

【いかれてなどおらんぞ】

んっ！なんでこいつ俺の考えていることがわかるんだ！？

【ほっほ、それはわしが神だからじゃ】

「本当に神様なのか？あと俺はなぜここにいる？」

【わしは本当に神だ、お前さんがここにいるのは死んだからじゃ】

なに俺は死んだのか？まあいいかでも俺はなぜ死んだんだ？

【それはこっちのミスでな本来お前さんは死ぬはずじゃなかったんだ・・・そこでお前さんには転生してもらう、この中から選ぶが良い】

そこには 遊戯王、IS、とある魔術の禁書目録、ガンダムsee
destiny、モンスターハンターだった

「うーん、んじゃISの世界でお願いします」

【了解した、なにか欲しい能力とかはあるか？】

「ならまず専用機が欲しい」

【どんなのが欲しい？】

「機動性重視で概観はストライクノワールで背中にはランスロット・アルビオンのエナジーウイングで武器はバスターの高エネルギーライフルとガンランチャーで高エネルギーライフルは無反動で弾は自分の思った弾がでるようにして、ガンランチャーは威力を高めて近距離を主体にして無反動であとはストライクノワールのビームライフルとビームブレードをお願いします」

【わかった、他に欲しいものはあるか？】

「前の世界でもってたあの力をもっていくことはできるか？」

【ああ、できるぞ、でもあの力はあまりよくないな】

「わかっているできる限りつかわないよ」

【わかった、他にはもうないかい？なければすぐ転生させるぞ】

「ああ、もうないありがとう神様」

【ほっほいいってことよこちらが悪いのじゃからな、ではいくぞ】

神様はなんか呪文をとこなえてるようだ、だんだんと俺の身体が光につつまれていく

【これで終わりだ】

「ああいろいろありがとな」

光が俺を包み込み意識がとおのえていく

【では神器、良い人生を】

そして完全に意識を失った・・・

プロローグ（後書き）

よんでくれてありがとうございます。

感想等ありましたらどんどんかいてください。

設定（前書き）

主人公の今のところの設定です

設定

名前 天空神器

身長 176 cm

体重 55 kg

性格 普段はやさしいがキレると口調がかわる 面倒見があまりないなど

容姿 細マッチョで整った顔だちで髪は肩までのびており縛っている 髪の色は黒 肌は白

好きなもの パスタ、戦い、面白い人

嫌いなもの 生のトマト ブロッコリー うるさい人たち しつこい人

専用機

LEE

機動性重視で色は黒、概観はストライクノワールで背中にはランスロット・アルビオンのエナジーウイングを搭載、エナジーウイングは最高速度で瞬時加速を上回る速さ
イグニッションブースト

武器

バスターガンダムの高エネルギーライフルとガンランチャー、ストライクノワールのビームライフルとビームブレイド、エナジーウィングのハリミtainな攻撃を使用

高エネルギーライフルは無反動で自分の思った弾がでる使用で一撃必殺以上のものはガンランチャーと合体しないと使えない

ガンランチャーも無反動でこちらは近距離をメインにして威力が高めでスモーク弾やスタン弾などの特殊な種類の弾がうてて、高エネルギーライフルと合体することで中・遠距離の散弾を高威力で照射する

設定（後書き）

チートな機体です。これから性格や機体設定が変わることもあるかもしれませんがどうかよろしくおねがいします

第1話（前書き）

本編開始です

高エネルギーライフルをライフルと呼び

ガンランチャーはそのまま

ビームライフルはストライクノワールのやつが二丁で呼び方はショ
ーティーと呼ぶ

ビームブレードはそのままで二つ装備です

第1話

んっんここはどこだ、俺は今どこかの部屋のベッドにいるようだ。

「ISの世界にきたんだっけな、とゆうことはISもどこかにあるはず」

俺は自分の身体を探して左の中指に違和感がありみてみるとそこには黒の指輪がはめられていた

「これが俺のISか、どこかにISを起動できることはないかな」

俺が思っていたら頭の中にこちらへん一体の知識が入ってきた、これは便利だつとここでいいかな。俺は近くの裏山まで移動した。

裏山

「いくぞ【LIE】」

すぐに薄い黒の粒子が俺を包みこみISをまとっていた。右手にはライフル、左手にはガンランチャーを装備していた。俺はフォーマツトと最適化、一次移行が終わるまで武器を色々出し入れして早くだせるようにしている。

「よしためしにガンランチャーの弾をゴム弾にして撃ってみるか」

ガンランチャーを抱えてゴム弾を木に向かって撃つ

《バキバキバキバキバキ》ものすごい音をたて木がなぎ倒されていく

「やっぱ、やばいやばいやばいこれはシャレにならないほど折れた
どうしようどうしよう」

ゴム弾は木を貫通して後ろの木にも貫通しまた貫通するのが8回つ
つぎ合計9本の木が折れた

『フォーマット及び最適化が終了しました。 確認をお願いします』
そう表示され確認を押す

『一次移行確認しました、「ピピッピピッ」前方からIS二機こちら
らに向かってきています。』

「機体の詳細を教えてください」

『一機は日本産の打鉄、もう一機はフランスのラファール・リヴァ
イブです』

「わかった」

「そのIS止まれ動くなそこでなにをしている」

そいつって打鉄をまとった女性が降りてきた、それに続きリヴァイ
ブをまとった女性も銃を向けながら降りてきた

「あなた達は誰ですか？」

「私はIS学園で教師をしている織斑千冬だ」

「同じく山田麻耶です」

「そうですか、俺は天空神器です」

「そうか、天空お前はここで何をしている、なぜ男のお前がISを動かすことができる、それはだれにもらった」

「俺ここで今日もらったISをここで動かしてただけだ、もらった人はわからい・・・寝てる時に指にはめてあったただけだ、なぜ起動できるのかは俺にもわからない」

「そうか・・・でお前は今からどうするんだ」

「どうしようね」

「いくあてがないならIS学園に入ることをオススメしますよ」

笑顔で山田先生がいつてくるが横の鬼が断ったら殺すと顔に書いてあるので入ることにした

「わかりました。入学式はいつですか？なにか必要なもの等あるならこの住所に送ってください」

「ほう、私はてっきり断ると思っていたが入るのか。まあいい入学式は三日後だ必要なものはあとで送る、うちの弟も一緒に入学するから仲良くしたってくれ」

「わかりました。あとその折れた木の後処理をお願いします、そ

れではさようなら」

俺は木の後処理をまかせ自分の【力】で自分の家まで瞬間に移動した、移動する前に織斑先生が待てといっているが無視した。

はああ転生初日から原作キャラに会うとはでもIS学園の入学式が三日後だとゆうとあの電話帳より太い参考書を覚えなといけなのはめんどくさいな・・・

まあいいや今日はもう寝よう

こうして転生初日が終わった

第1話（後書き）

感想やアドバイス等ありましたらどんどん書いてください

第2話（前書き）

だいぶ原作よりですが、みてくれると嬉しいです。

第2話

「全員揃ってますねー。それじゃあSHRはじめますよ!」

黒板の前でにこつりと微笑む山田先生は子供が無理して大人の服を着ました的な不自然な格好でいつているがみんな無視して俺と織斑一夏の方を見ている。

「そ、それでは自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順でえっと天空くんから」

涙目で自己紹介をお願いしてくるのですぐに自己紹介した

「え〜と天空^{あまぞらしんき}神器です。趣味は料理で好きな食べ物パスタ系で、嫌いなものはトマトです。え〜と一年間よろしくお願いします」

「きゃあああああああー!」

ソニックブームが起こり耳が滅茶苦茶痛い

「男子!男子しかもうちのクラス!」

「白馬が似合いそうな王子様!」

「守ってほしい!」

「み、みなさん静かにしてください、まだ自己紹介は終わってません、つ、次の人お願いします」

たんと自己紹介が終わり織斑一夏の番になった

「織斑一夏くんっ」

「はっはい!？」

いきなり大声をだして裏声になりまわりからくすくすとわらい声が聞こえる。俺も笑いをこらえている

「あつ、あの、お、大声出しっちゃてごめんなさい。お、怒ってる？怒ってるかな？ゴメンね、ゴメンね！でもね、あのね、自己紹介、『あ』から始まって今『お』の織斑くんなんだよね。だからね、ご、ゴメンね？自己紹介してくれるかなあ？ダメかなあ？」

見てみると山田先生が織斑にペコペコと頭を下げていた。

「いや、そんなに謝らなくても……っていつか自己紹介しますから、先生落ち着いてください」

「本当？本当ですか？本当ですね？や、約束ですよ。絶対ですよ！」

満面の笑みで顔を上げて織斑の手を取って熱心に詰め寄る。ってか近すぎだろ！

「えー……えっと、織斑一夏。よろしくお願いします」

みんなめちゃくちゃ織斑を見て「もっと色々しゃべってよ」とか「それで終わりじゃないよね？」とかの視線に刺されている

「……………」

「えーと」

視線がさらにつきさす

息を吸い込み

「以上です」

がたたつ。ほとんどの女子がずっとこけていた。俺？俺こけなかったぜ、だって原作しているもん

ボタンツ！すごい音がして頭を叩かれている

「げえっ、関羽！？」

パンツ！また叩かれている、すげえ痛そうだ

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

タイミングをみはからったのかどうかはわからないが山田先生が話しかけている

「あ、織斑先生。もう会議は終われたんですか？」

「ああ、山田君。クラスの挨拶を押し付けてすまなかった」

「い、いえっ。副担任ですから、これくらいはしないと」

さっきの涙声から復活していた山田先生ははにかんでいた。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、理解しろ出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠十五才を十六歳までに鍛えぬくことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

ものすごい暴力発言をはいたにもかかわらず

「キャーーーーー！千冬様、本物よー！
ーーーー！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！北九州から！」

いや北九州とか近いでしょ、ここには外国の人もきてるんだから

「千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

めちゃくちゃ叫んでるよくみると半分ぐらいの女子は叫んでる

「はああー毎年よくもこれだけの馬鹿者があつまるものだな。それとも何か？私のクラスだけに集中させているのか？」

織斑先生はうつとうしがっているようだ

「きゃあああああつ！お姉様！もっと叱って！罵って！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躑をして〜！」

はつきりいつてめちやくちやうるさい。いやまじでうるさいんだよ鼓膜やぶれるぐらいにうるさいんだよ！

「で？ 挨拶も満足にできんのか、お前は」

「いや、千冬姉、俺はー」

パンツ！うわ、またたかれているいたそうだな、織斑先生はしっているのかな、頭を叩くと脳細胞が五千個死ぬらしいということ

「織斑先生と呼べ」

「はい、織斑先生」

このやりとりであの二人が兄弟とゆうことがばれてチラホラきこえる

「さあSHRは終わりだ。諸君らにはこれからISの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作も半月で体に染みこませろ。いいか、いいなら返事をしろよくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

ものすごい鬼教官である。まだ悪魔のほうがやさしいと思う、おつとこつちを睨んできた目をそらした

「席に着け織斑、一時間目を始める」

第2話（後書き）

感想やアドバイスがあったらどんどん書いてください！

第3話（前書き）

主人公は大体原作を知っていますが、寝起きは忘れることが多いです

第3話

一時間目の休み時間

一夏side

この視線の雨はきつすぎる・・・もう一人の俺と一緒にやつがいたな・・・確か天空神器だったけ？話しかけてみるか

「天空だったけ、おれは織斑一夏って言うんだ、よろしく」

「ああよろしく。神器でいいぞ」

「なら、おれも一夏でいいぞ」

「わかった、一夏この空間きつくないか？」

確かにこの空間はきつい、視線に形があったら俺たちは穴だらけだ

「確におれもきつい。お前がいてくれてよかった」

「俺もだてゆ「ちょっといいか？」ん？一夏にか？」

あつ！筈だなんかようかな？

「ああ、一夏を借りる」

「ん？なんだ筈」

「話があるついてこい」

六年ぶりかゝつもる話でもあるんだろ

「ああ、いいぞ廊下でいいか」

「ああそれでは行こう」

side out

神器side

一夏たちいつちゃったから寝るかお休みい・・・

「織・・・入・・・の・・・書を・・・だか？」

んっん、なんだ？

「古・・・電話・・・間違・・・捨てました」

パンツ

ん？まさか俺は授業始まっても寝てたのか、まあいいかバレテないし

「必読と書いてあつただろうが馬鹿者、あとで再発行してやるから一週間以内に覚える。いいな」

よしばれてない・・・

「いや一週間ではっん！千冬姉、神器が起きてる！」

一夏のばかヤロー織斑先生こっちきたやがった

パンツ

「織斑先生だ馬鹿者」

「はい、織斑先生」

「では天空、居眠りの罰としてISとはなにか答えろ」

「わかりました。ではISとは・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・

省略

・・・・・・・・・・・・・・・・・・
「です」

おおおおっ、まわりから歓声が聞こえる

「すごいですね天空くん、私なんてその半分も理解してないです」

それでいいのか山田先生・・・・・・・・

「ここまでとはいわんがこれの半分ぐらいは理解しろ、ちよっどい

い時間だこれで二時間を終了する。号令！」

時計を見ると二時間目終了時刻だった

休み時間

「すごいね！天空くんよくあんなにも覚えれたね！」

そんなにすごいのか？ 主人公は記憶力はめちゃくちゃいいです

「なんかコツでもあるの？」

「いや、ただ読んだだけだよ、普通それだけで覚えられるよ」

「いや、普通覚えられないから」

「」「」「うん、うん」「」「」

一夏が言ったら、集まっている人が全員うなずく

「そうか？」

「普通そうだ」

「でも「ちょっと、よろしくて」ん？君はだれだい？一夏知ってる娘？」

「いや、知らない。」

本当は知っているが知らないフリをする

「わたくしを知らない？このセシリア・オルコットを？イギリス代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを！？」

ああ、耳元でうるさい

「質問いいか？」

「ふん。下々のものの要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

今の時代に貴族なんていたのか。覚えておこう

「代表候補生ってなんだ？」

周りで聞き耳を立てていたクラスの女子たちがずっこけた。

「あ、あ、あ、あなた本気でおっしゃってますの！？」

「おう。知らん」

すごいバカだ

「信じられない。信じられませんわ。極東の島国というのは、ここまで未開の地なのかしら。常識ですわよ、常識。テレビがないのかしら・・・」

テレビあるに決まってるだろ

「で、代表候補生って？」

「一夏、代表候補生って言うのは国家代表IS操縦者の候補生たちだ。簡単に言えばエリートってとこだ」

「そう！エリートなのですわ！」

ほんとにうるさい、こら人に指をさすな

「本来ならばわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡……幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」

もういいや寝よ、お休み……………

「……い……斑……推……します」

やばい！また授業中に寝てたのか、ていうかなんでみんな起こさないんだ？

「はい！私は天空くんを推薦します」

ん？今なんで俺の名前がでたんだ。なんの推薦だ？

「では候補者は織斑と天空のどちらかでいいか？」

だからなんの候補者だ！

「待つてください！納得がいきませんわ！」

俺が納得しとらんわボケ。なんの候補者だ！

「そのような選出認められません！大体、男がクラス代表なんていい恥さらしですわ！わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

そうかクラス代表か、やりたくないなー一夏におしつけるか。よしそうしよう

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！わたくしはこのような島国までIS技術の修練に来ているのであって、サーカスをしにきたのではないですわ！」

それなら俺たちが猿なら地球上の人間全員猿だし

「いいですか！？クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！」

「大体、文化としても後進的な国でくらさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で――」

カチン 俺がキレた音

カチン 一夏がキレた音

いわせておけばキャンキャンと

「イギリスだって大してお国に自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

「文化としても後進的？ならISはこの誰がつつくだんだ？イギリスなのか？違つたろ日本の一人の女性が作ったんだぞ。なら君の大好きなイギリスはISを作るのか？作れないだろ。さてどっちが後進的な国ですか？」

「なっ！？あなたたちわたくしの祖国を侮辱しますの！？」

「決闘ですわ！」

パンツと机を叩いて言つて来た。机がかわいそうだ

「おう。いいぜ。四の五の言つよりわかりやすい」

「言つておきますけど、わざと負けたらわたくしの小間使い——いえ、奴隷にしますわよ」

ほうこいつにそういう趣味があるのか覚えておこう

「真剣勝負で手抜くほど腐っちゃいない」

「なら一夏負けたたら俺になんか奢れ」

「なんでだよ」

「いやなんとなくだ、そのかわり俺が負けたらお前のほしい物を買つてやる」

「わかった、その話のろう」

うんうんわかつてるねえ一夏でも俺絶対に負けないから

「ほう、教師の前で賭け事か」

「織斑先生もどうです？一夏か俺が負けたら、俺が自腹で何でも欲しい物を買ったり用意しますよ」

「今回だけは見のがしてやる」

やった買収成功

「っでハンデはどのくらいつける？」

「あら、さっそくお願いかしら？」

「いやおれたちがどのくらいハンデつけるたらいいかなーと」

一夏がいったらクラス中から爆笑が巻き起こった

「織斑くん、それ本気で言ってるの？」

「男が女より強かったのって、大昔の話だよ？」

「織斑くんは確かにISに使えるかもしれないけど、それは言い過ぎだよ」

すごいみんな笑ってる、そんなに笑えるのか？

「……じゃあ、ハンデはいい」

「ええ、そうでしょう。むしろ、わたくしがハンデを付けなくてい

いのか迷うくらいですわ。ふふつ、日本の男子はジョークセンスがあるのね」

べつに全員がジョークセンスあるわけじゃないけどな

「ねー、織斑くん。今からでも遅くないよ？セシリアに言って、ハ
ンデ付けてもらったら？」

近くの子が一夏に言ってるやさしいなあ

「男が一度いったことを覆せるか。ハンデはなくていい、だろ神器」

「まあ、そうしとくか」

「えー？それは舐めすぎだよ。それとも、知らないの？代表候補生
の力を」

まあ確かに代表候補生は強いのだろう、だがおれに勝てるやつなん
ていない・・・

「さて、話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜の放課
後に行く。織斑、オルコット、天空はそれぞれ用意しとくように。
それでは、授業を始める」

・ ああ、すごくめんどくさいもついいや寝ようそれがいい、お休み・

「寝るな！天空」

バゴンッ 行ってあれやばい意識が・・・

第3話（後書き）

読んでくださってありがとうございます

感想等かいてくれたらうれしいです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2861z/>

IS 新しい人生

2011年12月13日00時54分発行